

地域移行支援・地域定着支援のための教材を使用したプログラムの紹介と工夫

千葉 裕明
(埼玉 SST 研究会)

古くて新しいこと：「スキル」を学習すること

私たちは認定講師になる前から、お互いの現場で出てきた“ネタ”を埼玉 SST 研究会に持ち込んで、この参加者として SST を勉強してきました。このたびは、私たちのこの古巣の仲間たちと作った教材を、全国経験交流ワークショップという大舞台でご紹介できることにドキドキしています。

さて、このたびのシンポジウムのテーマは、「e-SST をつくる私の経験」とうかがい、私たちが作った教材の意味と使った経験を考えました。するとやはり、「スキル」の学習に行きつくのではないかと思いました。と言いますのも、自分たちの現場で SST をやったり、リーダーのスーパーバイザーとして研究会に参加したりするときに共通するテーマのひとつが、「なにをスキルとしてトレーニングしているのか」ということだからです。また、私たちの所属する南関東支部で開かれる勉強会や研修会でも話題に上がるのが、「場面の練習か、スキルの練習か」、というものです。このことから想像がつくように、「スキル」がなんなのかがあいまいであることが、学習者と支援者の双方にとって実のある SST とするための壁になっていると感じました。実際、坂野（1995）は、SST の特徴の第 1 に、「特定の行動（スキル）の学習を基本とする」、を挙げています。当たり前のようですが、スキルが特定されなければ学習はできない、そしてそれを特定するのはリーダー（とコリーダー）の仕事であり、それが学習者との間で合意・決定されていく、ということなのだと思います。

学習のしやすさは般化のしやすさ？：構造化されたプログラムの開発の意味

今回の教材開発のきっかけは、実は開始から 2 年目、SST のグループを運営する救護施設の職員さんたちへの定着支援の時期でした。ここでやはり壁となったのは、「『スキル』をどのようにトレーニングするか」よりも、「何を『スキル』としてトレーニングするか」、ということでした。つまり、支援者はソーシャルスキルのアセスメント技法を学んで学習者のことが具体的に掴めたとしても、学習者にどのようなスキルを提供したらよいか掴みにくい、ということらしいのです。

学習者にとって学習がしやすい、ということは、スキルが具体的であるということです。また、般化がしやすい、ということは、スキルが普遍的であるということです。つまり、スキル選定が妥当であれば、学習者にとっての学習のしやすさと、支援者にとっての支援のしやすさは矛盾しないのではないかと考えました。そして、プログラムを構造化するために用いたのが、リバーマンら（1992）の「学習活動」です。これは系統的な学習方法であり、スキルは階層性を持っています。このことは、学習者にとってはスキルの学習と般化のしやすさを促進する一方、提供するスキルとその順序が決まっていることから、支援者にとっても使いやすいものができると思いました。

教材開発と empowered-SST : プログラム試行からの考察

演者である認定講師がリーダーを担当し、この教材を用いてプログラムを試行した結果は、スキル群によってその効果が異なりました。この結果は、教材に改善の余地が残されていることを示唆するものですが、その一方、支援者に興味深い変化がみられました。まずは同席した支援者自身に、教材で扱ったソーシャルスキルの向上が認められました。そして、学習者になにを支援すればいいのかが明確になった、との報告もありました。このことから、今回の教材が目的とした学習者と支援者双方に使いやすいものを、という当初の目的（願い）の、その後半は叶ったのかなと思います。

スキルは普遍的ですが、その組み合わせは自由自在です。シンポジウム当日は、この教材開発が、empowered-SST の文脈のなかで、どんなふうにお役に立つことができるのかを考察し、ご参加になる皆さまと共有できたらと思います。